

いわゆる“ターナー松”の生長について<sup>‡</sup>

山畑一善\*・山本 武\*・藤本幸司\*・三好 博\*

## はじめに

船頭はゆっくりゆっくりこいでいるが熟練は恐ろしいもので、見返ると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針のようにとんがっている。向こう側を見ると青嶋が浮いている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ばかりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望していい景色だと言ってる。野だは絶景でげすと言ってる。絶景だかなんだか知らないが、いい気持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは葉だと思った。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹がまっすぐで、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに言うと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲がりぐあいつたらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとはなんのことだか知らないが、聞かないでも困らないことだから黙っていた。舟は島を右に見てぐるりと回った。波は全くない。これで海だとは受け取りにくいほど平らだ。赤シャツのおかげではなはだ愉快だ。できることなら、あの島の上へ上がってみたいと思ったから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられんこともないですが、釣りをするには、あまり岸じゃいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙ってた。すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじゃありませんかとよけいな発議をした。赤シャツはそいつはおもしろい、われわれはこれからそう言おうと賛成した。このわれわれのうちにおれもはいつてなら迷惑だ。おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラファエルのマドンナを置いちゃ。いい画ができますぜと野だが言うと、マドンナの話はよそうじゃないかホホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。(旺文社文庫「坊っちゃん・草枕」より)

ご存知『坊っちゃん』の一節である。“野だいこ”の提案に“赤シャツ”が賛成し命名した“ターナー島”は、作中では“青嶋”となっているが、実の名を「四十島」と言う。松山市高浜町一丁目黒岩の沖合、約200mに浮かぶ周囲およそ150mの岩礁(花こう岩)である。明治25年秋、正岡子規の句に「初汐や松に浪こす四十島」がある<sup>1)</sup>。

漱石は明治28年4月、松山中学の英語教師として赴任、子規との交友を深めているが、この四十島を望見する場所で句会を開いたり、海で泳いだりしている。そのころ見た四十島の印象が『坊っちゃん』に描かれたのだ、と言われている。

さて、この四十島、明治38年ごろの数葉の写真で見ると、

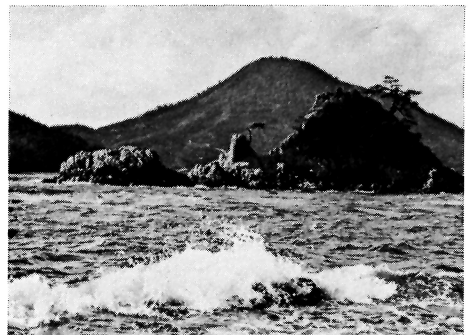


写真1 四十島の景 一昭和52年一  
(撮影・石崎 健治)

<sup>‡</sup> Kazuyoshi YAMAHATA et al ; Age and Growth of Pine Tree of “Turner Island”.

\* 森林計画学研究室 Laboratory of Forest Management

本稿の要点は『図書』1982年8月号(岩波書店刊)に発表した。

数本（5～6本）のクロマツが生育している。そのうち「幹がまっすぐで、上が傘のように開いて、いるマツは、2本（見方によっては3本）である。だが「赤シャツ」が指さしたであろうマツが、どれであったか特定することはできない。北の岩頂上のマツは、昭和13年に枯死根倒し、消失したという（松山市雄郡小学校教諭・北岡杉雄による）。「ターナーそっくり」のマツ2本は、近年まで残っていたが、今は無い。

昭和52年秋、北の岩斜面に立っていた1本が、マツクイムシの被害で枯死し、除去されることとなった。私どもは、生長研究の資料とすべく譲り受け、12月26日これを伐倒し樹幹解析に供した。生育の場所・樹姿・大きさなどからみて「ターナー松」にふさわしいと判断していたからである。これには無論、異説もある。例えばNHK松山放送局は、昭和56年6月10日、「ターナー島・マツの謎」を放映し「ターナー松」は中の岩斜面に立っていた木ではなかったか、との疑問を投げかけている。だが、このマツも昭和55年6月に枯死消失していた（北岡教諭確認）。

さて、いずれにせよ、厳しい環境に耐えて生育した「ターナー松」とおぼしきクロマツの、年齢と直径生長を明らかにすることができたので、公表し江湖のご参考に供する次第である。なお、私どもが査定した円板は、愛媛県立博物館に展示保管されている。

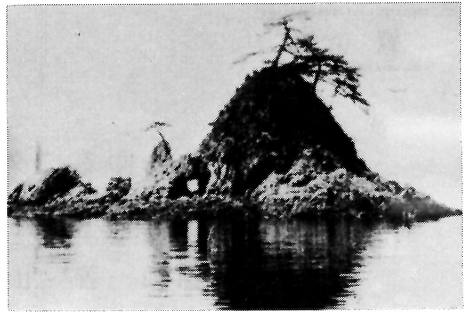


写真2 四十島の景 —明治37～38年—

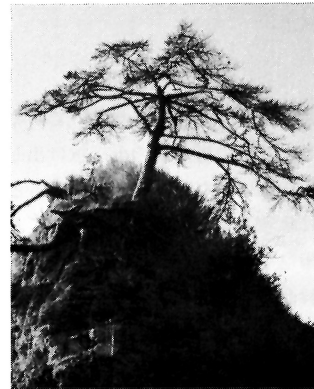


写真3 ターナー松 —昭和52年12月伐倒直前—

## I 樹 齢

供試木は、北の岩の北側斜面上部に立っていた。昭和52年12月、伐倒直前の樹姿は写真に見られるとおりである。幹が傾斜の上側地表面と接する位置を樹高0.0mとし、ここから幹軸に直角方向に円板を採取した。年輪数は154個であった。しかし、円板下面から幹軸の根元まで50cmの高さがあったので、これに要する年数を推定加算すれば、樹齢は160～170年と考えられる。「ターナー松」の年齢は、165年と押さえて、まず大きな誤りはないものと思う。これから逆算すれば、このクロマツは、文化9年ごろ（1812）発芽し、風雪に耐えること83年にして、夏目漱石の目に触れるところとなった訳である。

## II 直径生長

供試木は、いわゆる傘マツで、幹は直立していたが、高さ4.3mのところまで折損していた。したがって、通常の樹幹解折を行なうことができない。そこで胸高直径生長の解析を主とし、加えて、高さ4.3mまでの樹高生長経過をみることにする。

胸高直径総生長曲線を、図1に示す。比較のため「会見のマツ」の曲線をも描いておこう。会見のマツ<sup>2)</sup>は、宇和島藩主・伊達宗城の邸内に植えられていた、樹齢110年のクロマツである。両者の生育環境には、極端なまでの相違があるが、直径生長の差は、図に見るとおりである。供試木は伐倒当時、有皮直径40cmとなっていたが、明治28年当時は29cmであったことが判明した。図2は、直径総平均生長および連年生長曲線を示す。樹齢35年から55年ごろは年平均8～9mmと、かなり良好な生長を示しているが、その後、急激に低下し、75年以後いくらか回復している。この連年生長の傾向、ならびに明治37～38年の写真<sup>3)</sup>から見るに「坊っちゃん」が望見した当時（明治28年）、すでに、幹の4.3mから上部は、折損して無かつたものと考えられる。つまり中途折損の後、残存した幹の肥大生長および枝の生長はあつたが、樹形そのものは、伐倒当時までほとんど変化がなかった、と言えるであろう。

図3は、幹の高さ4.3mまでの樹高総生長曲線である。樹齢35年にして、漸く胸高を脱して1.5m、47年にして4.3mに達している。この時期、安政6年(1859)に当たる。すなわち、これまでの検討から、主幹の折損消失は、この時期以後、敢えて言うならば維新後、しかも20年ごろ(1887)までの出来事、と推定することができよう。

なお、幹の頂部で南西方向に大きな枝が出ており、幹の折損後、恐らく幹代わりの役目を果たしたと思われるが、その生長の詳細については省略する。要点を表1に記しておこう。

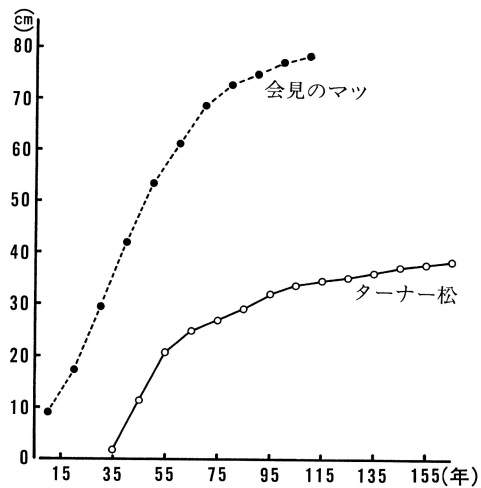


図1 胸高直径総生長曲線

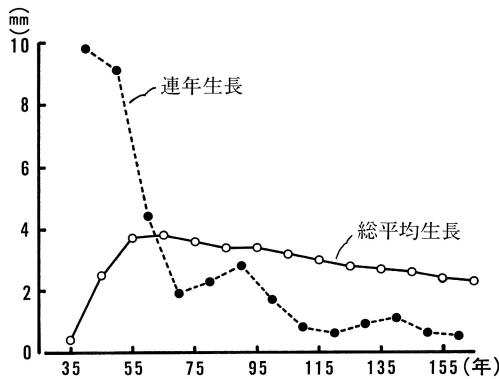


図2 連年および総平均生長曲線

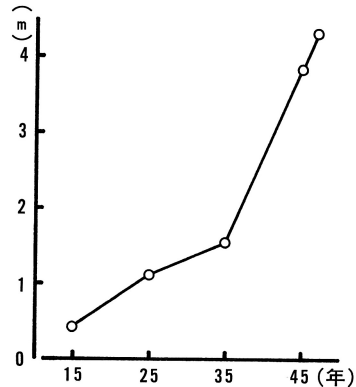


図3 樹高総生長曲線

## おわりに

松山市高浜沖に浮かぶ岩礁「四十島」に生存していた、いわゆる「ターナー松」の生長過程の一端について記述した。『坊っちゃん』に出てくる「ターナーそっくり」のマツが、この供試木であるとは断定できないが、かと言って否定もできないのである。野だいこが「あの岩の上に、どうです、ラファエルのマドンナを置いちゃ。いい画ができますぜ。」と言っている点からみて、ターナーの「チボリートピアスと天使<sup>4)</sup>」と題する絵が、念頭にあったものと思われる。供試木の位置や形姿など、いかにもこの絵と類似していた。異説も無い訳ではないが「ターナー松」と呼ばれた所以である。なお、表1にデータの要点を示し、あわせて円板写真を掲げ、ご参考に供したい。

表1 総括

事項		明治28年秋 (1895)	昭和52年秋 (1977)
主	年齢	83年	165年
	樹高	4.3m	4.3m
幹	胸高直径	29cm	40cm
最	年齢	37	119
大	枝長	4.3m	6.9m
	枝基部径	9.7cm	20.7cm

稿を終えるに当たり、調査にご協力を賜った愛媛県林政課・朝日新聞および毎日新聞に対し、深謝の意を表する次第である。

## 文 献

- 1) 鶴村松一；正岡子規一故郷松山平野の文学風景一，松山郷土史文学研究会，昭和52年。
- 2) 山畑一善；虚像だった「会見のマツ」，山林No.1140，昭和54年。
- 3) 高浜小学校PTA郷土史編集委員会；たかはま，昭和53年。
- 4) 後藤茂樹編；世界美術全集18・ターナー，集英社，1979。

(1982年7月29日受理)



写真4 高さ 0.0mの円板  
一年輪 154個一



写真5 高さ 0.3mの円板  
一年輪 152個一

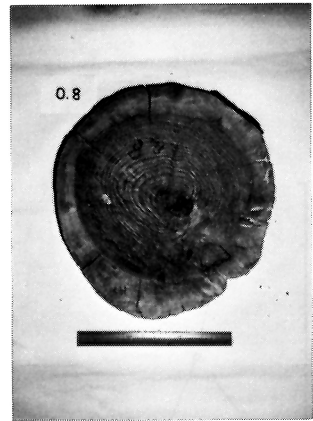


写真6 高さ 0.8mの円板  
一年輪 143個一

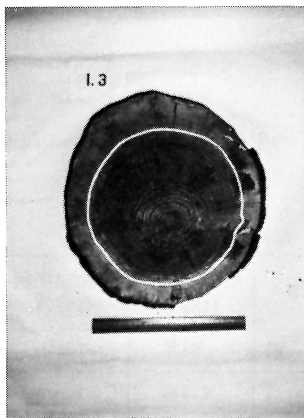


写真7 高さ1.3mの円板(胸高円板)  
一年輪 134個一  
(白線は明治28年当時を示す)

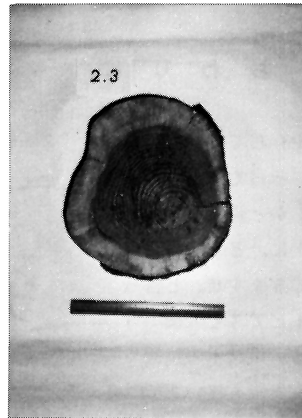


写真8 高さ 2.3mの円板  
一年輪 129個一

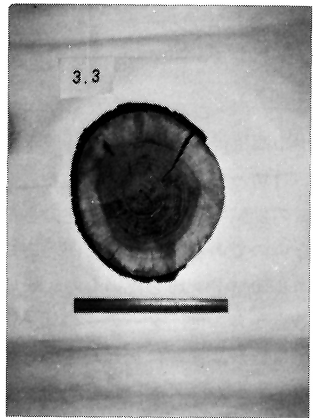


写真9 高さ 3.3mの円板  
一年輪 124個一